

Yahooニュースに

今年は鰻が高騰する

どうやら、デフレ経済基調で株価が下がれば鰻は逆に「うなぎ登り」に高値となるらしい。

大学生の時、お友達の田舎まで遊びに行った。

天然ものの鰻が名物だということで「鰻釣り」を見せてもらったが町とあまり離れていない川で鰻が釣れる。

餌はミミズ。

それを竹の枝に釣り糸を結び付けて4～5本流しておくだけで。鰻くんは夜遊びが大好きで夜遊びついでに餌にパクりと食いつく。朝早く見に行くと天然モノの鰻くんが8の字になって観念しているか、長～く伸びている。

鰻くんの漁獲量は1970年代ごろから大幅に減少。

2013年にニホンウナギは絶滅危惧種に指定された。

さらに、2018年の1月、報道各社は衝撃的なニュースを伝える。

なんとウナギの漁獲量は前年同期比の1%という大激減。

コレでウナギの高騰が懸念されないのなら「鰻くんの日本国での需要は霧のように消えた」ことになる。

「絶滅危惧種に指定されたニホンウナギの漁自体をやめるべきだ」「このままでは本当に絶滅する」と言った御意見がみられますが、絶滅させるのは日本人の罪。ニホンウナギの漁自体をやめる決断は仕方のない事かもしれません。



最近の研究では「ニホンウナギはマリアナ海溝で産卵し、孵化後は台湾を経由して日本や中国、韓国方面へ進み、親ウナギに成長するとまたマリアナ海溝に戻っていく回遊魚。ニホンウナギが絶滅すれば中国産も韓国産も台湾産も消えてなくなります。

それでは近畿大学の「黒マグロ」のように人間の手でニホンウナギも養殖できるのか？

日本自然保護協会は、ニホンウナギの減少の原因の1つは多くの堰（せき：水をせき止める目的で河川や湖沼などに設けられる構造物）が、ウナギの遡上阻害となる高さ40センチ以上あり、ニホンウナギにとっての環境が良くない。

なるほど「ただいまー」と帰ってくるニホンウナギを「もう帰ってこんでもええでー」と締め出しているようなもの。

そりゃあ、娘も「グレてやるーッ」てなもの。



それから、ウナギにかかわる業者の方は「土用の丑の日」だからウナギを食べるというキャンペーンはしばらく控えたほうが良いかもしれない、ともいう。

ところが水産庁は、2018年が際立った不漁というわけではありません。ニホンウナギは年によって漁獲量に大きな差があり、本来、安定しない水産物なのです。

また、前年同期比1%という数字についてですが、これは2017年が非常に特殊だったことを考慮する必要があります。通常ニホンウナギ漁獲のピークは1月～2月にかけてです。ところが2017年12月～1月がピークでした、2月ごろにはもうあまり捕れなくなっていました。つまり、例年になく早い時期に捕れた2017年の1月と通常の不漁の範囲内の2018年の1月、両極端に振れた時期



同士を比べているため、前年同期比1%という数字が出ます。

また、2018年はこれから多く捕れる可能性もあります。

- ◆資源自体が減っていることと、
- ◆今年1年間の不漁は、切り分けて考える必要があるでしょう。

日本自然保護協会 は日本の食卓にのぼるニホンウナギは、シラスウナギを獲って生簀で養殖したものがほとんど。この状況が続けばニホンウナギが絶滅する可能性が高いと思います。

.....
素朴な疑問だが、『絶滅危惧種』に指定されているニホンウナギは食べてもかまわないのか？
.....

水産庁 は大丈夫です。「絶滅危惧種」はIUCN（国際自然保護連合）が定めているものであり、特に法的な拘束力はありません。



シラス漁2015年

日本自然保護協会 「絶滅危惧種」として評価されただけでは法的な拘束力はありませんが、絶滅危惧種のレベルにより個体群が消滅する危険が高いとされている絶滅危惧種は当然食べてはいけません。科学的な検討の上で「種の保存法」という別の国内法や「ワシントン条約」という国際法で規制されることがあります。ニホンウナギは個体群の減少率から絶滅危惧種に指定されていますが、現時点では直ちに絶滅するものではありません。

きちんとした、「個体数の把握」と「持続可能なシステム」が構築されているのなら食べてもいいと思います。

ただ、残念ながら、資源管理も個体数の把握もきちんとされているとはいえないのが実態で、早急にシステムを確立するべきです。

今のところ、ニホンウナギの禁漁ということは考えられないが、

今後さらに数が減り個体群を維持することが困難な数になれば、科学的なデー



シラス漁2018年
不良の為、業者もまばら

タに基づいて「種の保存法」による保護増殖の対象になり、「捕ること」や「流通させる」ことが法的に禁止になります。

水産庁 2018年の不漁については、専門家の間では潮の流れが原因と推察されているので仕方のないところがあります。1年の不漁だけを見て慌ててどうにかというのは、勇み足になりかねません。

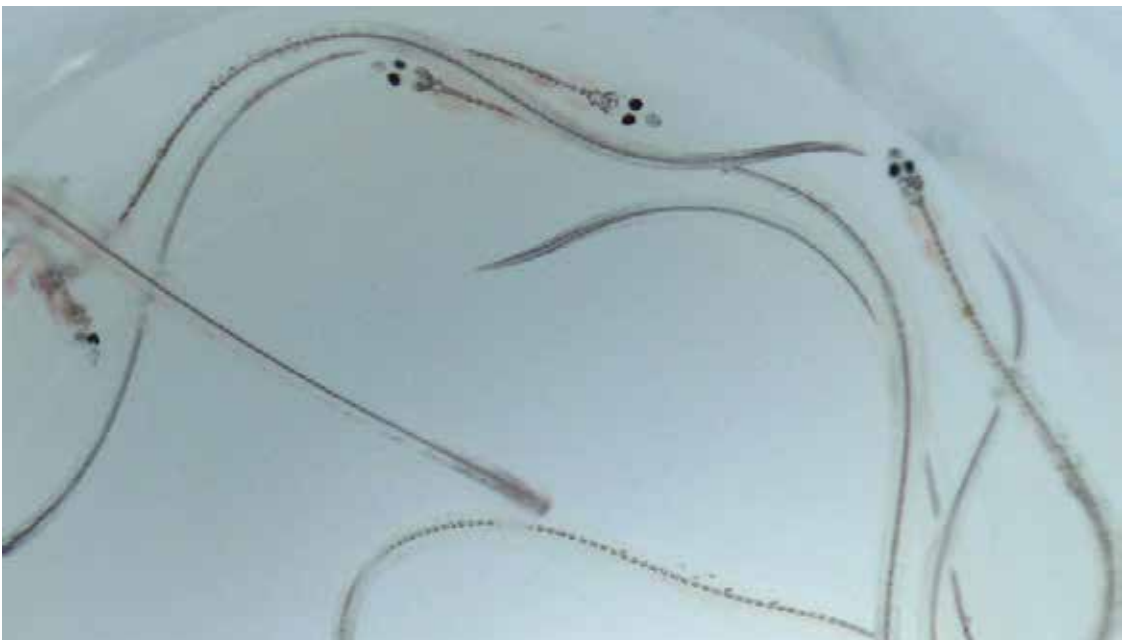
日本自然保護協会 個体数把握のための調査や、資源管理の仕組みが不可欠です。

また、参考資料として、ウナギについて考える「うなぎ未来会議2016」というものが2016年に開催され、そのレポートがまとまっています。ニホンウナギをIUCNレッドリストで評価したときの専門家らが開催し、まとめたものです。

水産庁と日本自然保護協会の意見が一致している点はニホンウナギが「直ちに絶滅するものではない」しかし、「不漁が続けば食卓から消える可能性はある」という。

消費者がウナギの購入を控えるべきかどうか、だが「土用丑の日だから」ウナギを食べようという単細胞的発想は控えて、栄養豊富な食材である。日常的に食べることをお薦めしたい。「必要は発明に母」というではないか。なかなか手に入りにくい食材、高くても日本人が大好きなウナギなら、研究に時間とお金を投下しやすい。

加藤ヒフミン（一二三）を永年支えてくれたのはニホンウナギの鰻重であることは間違いない。



海のダイヤ シラス（ウナギの稚魚）